

# ヨーロッパのプロジェクト命名法に見るギリシャ神話への回帰

青木 正喜

成蹊大学工学部 電気電子工学科

英国のエリザベス女王が、即位40周年記念式典のスピーチで1992年をラテン語で“annus horribilis”と回顧されたという記事を読んで、英国上流階級の教養の高さに感服しました。これは“annus mirabilis”(驚異の年/1666年)というラテン語を基にしたものです。1666年は、ロンドンが大火とペストの大流行に見舞われたものの、海戦でオランダを破り人々に復活への希望を与えました。そこでJohn Drydenという詩人が“annus mirabilis”という題の詩を書いて称えたというわけで、英国史において重要な年であり、この詩はよく知られているようです。

ヨーロッパでは、スピーチ、書物、文章の中でギリシャ語やラテン語がよく引用されています。ここでは、ヨーロッパにおける道路交通情報化関連プロジェクト名の中から、ギリシャ語、ギリシャ神話の神々への回帰を探ってみることにしたいと思います。

現在ヨーロッパで進行中の2つの大きなプロジェクトとしては、プロメテウス計画とドライブ計画があります。

プロメテウス計画(PROMETHEUS:PROgraMme for European Traffic with Highest Efficiency and Unprecedented Safety)はユーレカ計画(EUREKA:EUropean REsearch Co-ordination Agency)の一環として行われています。eureka(わかった)はギリシャ語では先頭に“h”がつきますが、アルキメデスが入浴中に浮力の原理を発見したときには、こう叫びながら今で言う「ストーリーキング」をしたといわれております。プロメテウス(Prometheus)は、人間を作り、人間に色々な技術を教え、大変人間びいきでした。ゼウスから堅く禁じられていたにもかかわらず、人間に火を与えたため、ゼウスの怒りにふれ岩に縛り付けられ、毎日大鷲に肝臓を食い破られることになりました。プロメテウス計画は火を手にし、爆発を繰り返し

ているエンジンの上に乗っている人間に、効率と安全性を与えることとなります。

ドライブ計画(DRIVE:Dedicated Road Infrastructure for Vehicle safety in Europe)はECの下で、DRIVE IIが1994年までの3年計画で進められております。プロメテウス計画は車を、ドライブ計画はインフラを主体としております。ドライブ計画のプロジェクトにはギリシャ神話と関係の深い名前が多くみられます。気がついたものだけでも、ARIADNE, HERMES, ICARUS, PANDORA, PLEIADESとよくまあ取り揃えたものと感心します。特にパンドラ(Pandora)はギリシャ神話において、プロメテウスと密接な関係があります。パンドラは人類最初の女として作られ、人間のあらゆる害悪を封じ込んだ箱(パンドラの箱)を持って、プロメテウスの弟のエピメテウスの妻となりました。ドライブ計画のプロジェクトとしてのパンドラ(PANDORA:Prototyping A Navigation Database of Road-network Attributes)は、人類にあらゆる害悪を及ぼしたパンドラの箱ではなく、パンドラに神々から授けられたあらゆる美質にあやかっているのでしょうか。パンドラが好奇心から箱を開け、慌てて閉めたときに箱の中に残されたのは希望でした。ドライブのプロジェクトの一つとして希望(HOPES:Horizontal Project for the Evaluation of Safety)が用意されているのには、「脱帽」です。さらに、ドライブプロジェクトのサブシステムの名称として、古代エジプトで信仰された神々の中で最高位の女神、豊饒の大母神イシス(Isis)を見つけることが出来ます。イシス(ISIS:Interactive road Sign System)はドライブのTESCO(TESt on COoperative driving)プロジェクトに用いられているサブシステムの名称です。

このように見ていくと、ヨーロッパ文化の底の深さに改めて感銘を受けずにはられません。